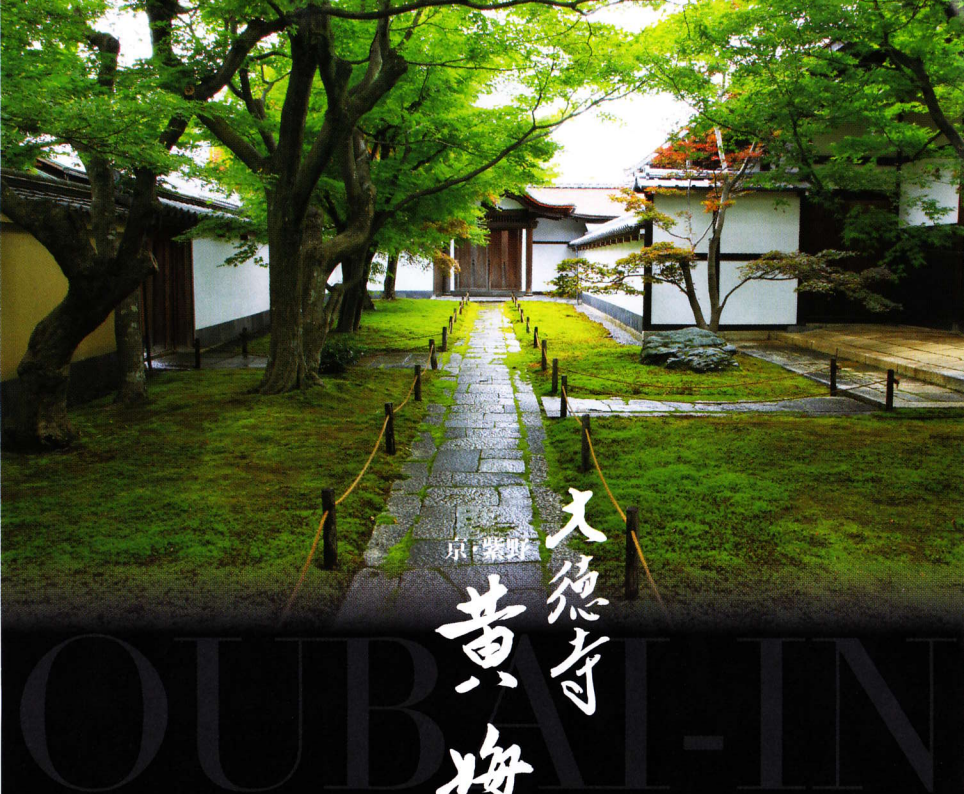


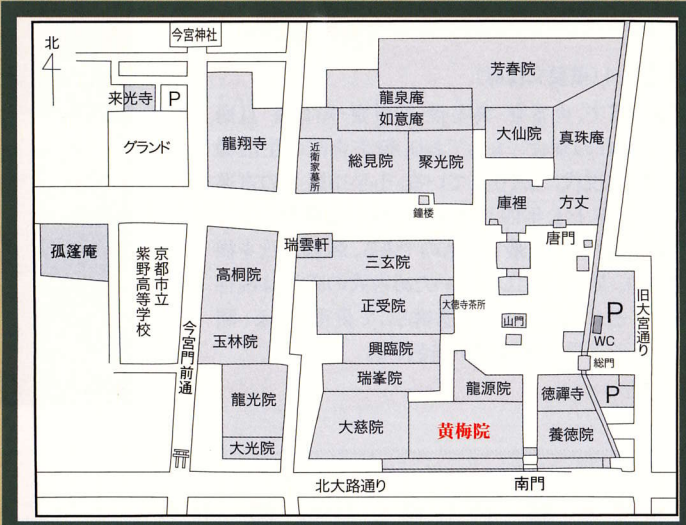


大徳寺
京・紫野
黄梅院

当院は臨済宗大徳寺派大本山の塔頭の一つである。「黄梅院」とは、お釈迦様から代を重ねて三十二代目、弘忍大満禪師のゆかりの地である中国の黄梅県破頭山東禪寺に由来し名付けられた。永禄五年（一五六二）織田信長公が二十八歳のとき羽柴秀吉公を伴い初めて入洛すると信長公は秀吉公を京都所司代に任じ、併せて父・信秀（法名：万松院殿。天文二十年（一五五二）寂）公の追善菩提のために普請を命じ小庵を建立させた。この小庵は大徳寺九十八世住持・春林和尚を開祖に迎え「黄梅庵」を名付けられた。これが当院の始まりである。

天正十年（一五八二）六月二日、本能寺の変により信長公が急逝すると、同年十月十五日密葬され、その後、秀吉公は「黄梅庵」に築を加える。しかし主君の塔所としては小なりとし、信長公の法名・総見院殿より総見の名を採り山内に別に「総見院」を建立し、お祀りした。当院は築を新たにし、天正十四年五月秀吉公によつて本堂と唐門が改築され、天正十七年（一五八九）鐘楼・客殿・庫裡等を小早川隆景普請奉行のもとに改築落慶し、この年「庵」を「院」に改めている。時に当院二世・玉仲和尚（大徳寺三世住持）の代である。

大徳寺
山内図



京・紫野
大徳寺塔頭 黄梅院

京都市北区紫野大徳寺80
京都春秋事務局（お問い合わせ先）
TEL:075-231-7015
FAX:075-231-6420

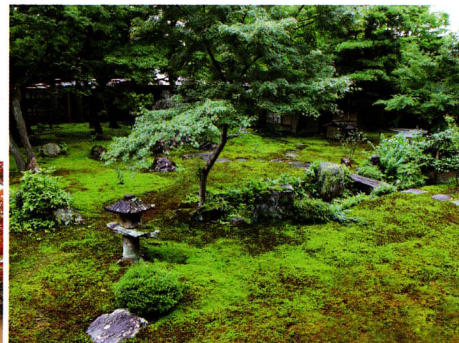


■庫裡くら (重要文化財)

切妻造板葺で、火番寮・典座寮・納所寮・知客寮・旦過寮とそれぞれの寮舎になっており、禅宗寺院の生活様式をそのまま現代によく伝えている。小早川隆景の寄進によって天正十七年四月に完成。日本に現存する禅宗寺院の庫裡として最古のものである。庫裡は火を扱う所であり、火災をおこしやすいため古式の庫裡は残存しにくい。故に現存している遺構として貴重である。昭和六十年十二月解体修理が施された。

■破頭庭はとうてい

本堂前庭に位置する。半分手前を白川砂で半分向いを桂石で区切り苔を配し観音・勢至の二石でまとめられた簡素な庭で天正年間に作庭されている。



■直中庭じきちゅうてい

利休六十六歳の時に作られたものである。秀吉公の希望による軍旗瓢箪をかたどった池を手前にし、大徳寺二世徹翁和尚が比叡山より持ち帰ったと伝える不動三尊石を正面に、加藤清正伝承の朝鮮灯籠を左に配した苔一面の池泉式枯山水庭園である。

■本堂 (重要文化財)

禅宗特有の様式がよく表された本瓦葺入母屋造である。内部は室中と仏間を中心に檀那の間・衣鉢の間・礼の間・大書院の間に別れている。天正十四年五月に秀吉公の援助により落慶している。昭和五十二年、四百年ぶりの全面解体工事がなされた。

■唐門からもん (重要文化財)

建立は本堂と同じ年に完成されている。

■表門

天正十七年完工され、庫裡の造営と同じく小早川隆景によつて寄進されている。なだらかな兜型の門である。平成十七年、修理を施された。

■鐘楼しょうろう

鐘は一五九二年、加藤清正によつて寄進されたもので朝鮮伝来のものと伝う。現存の鐘楼は益田玄播守によつて建立された。獅子頭の彫刻が施されている。平成十七年、修理を施された。

■書院自休軒

大徳寺開山大燈国師の遺墨「自休」を扁額に懸けて軒名とした。千利休の茶道の師である武野紹鴎作の昨夢軒という茶室がある。平成二十三年、修理を施された。昨夢軒の席は貴人床になつていて、書院自休軒の中に組み込まれているところから囲え込み式と言われている。

■襖絵

桃山時代のもので重要文化財に指定されているが、現在の襖絵は複製となっている。本堂の中には雲谷等顔の水墨壁画が収められている。室中には竹林七賢図・檀那の間に西湖図・礼の間に昔雁図等四十四面となっている。

■作仏庭さくぶつてい

本堂北裏側に位置し北東に枯山水の滝を表す立石を配し、南への流れの中に小船を浮かべ、本堂前の破頭庭へと連なった作りである。生々流転を表したもののか。